

WHAT

オーストリア・ウィーン工科大学

理学部 物理学科 3年
大下紗百合

ウィーンといえば、ヨーロッパの中でも特にクラシック音楽が盛んであり、「音楽の都」とも呼ばれています。また、治安も比較的良く、世界で最も質の高い生活が送れる都市ランキングで3年連続1位の座を獲得しています。一見物理とはあまり縁がなさそうな国なのですが、ウィーン工科大学は高校物理でも学習する、ドップラー効果を発見したクリスチャン・ドップラーの出身校であり、また工科大学ということもあり、色々な分野を勉強できるという点に魅力を感じ、昨年貴重な1年間をウィーンで過ごして参りました。これまでずっと日本で平凡にそこまでの努力も挫折もすることのなかった私にとって、この1年はとても刺激的で魅力的な1年間でした。

留学中は何度も壁にぶち当たりました。まずは、留学前から覚悟していた語学の問題です。ウィーンの公用語はドイツ語で、当たり前ながら基本はドイツ語を使用しなければいけません。また、大学の授業はほとんどドイツ語で、英語で行われている授業はほんの一部で、しかも学部生用ではなくマスターやドクター生用だったので、日本でもまだ基礎しか学習していない私にとっては、高度なお話すぎてとても理解することはできませんでした。その高度な授業をずっと続けるべきか悩みましたが、やはり語学の壁があったとしても自分のレベルにあった授業を選択し、その中で頑張っていこうと思いつき、後半のセメスターはドイツ語の科目の授業を主に履修しました。とても大変でしたが、思うような結果は上手く出せませんでした。自分が思い出せる中で一番努力をした期間だったので、満足しています。

つぎにあげるのは、留学中の人間関係です。
お茶大からウィーン工科大学への派遣生は1名

で私だけでしたので、友達が誰もいない状態でのスタートでした。英語もドイツ語もままならない私は不安で一杯でした。しかし、運がいいことに留学前のドイツ語の語学学校で他大学からの日本人留学生に出会い、友達になることができました。はじめ私は現地の友達を作る機会にめぐり合うことがあまりなく、現地の友達を作ることが出来ませんでした。しかし、ウィーン工科大学ではなく、ウィーン大学に日本語学科があり、そこでアシスタントを募集しているということを知り、前学期から工科大学に留学中の他大学の方から教えていただき、そこでアシスタントをさせていただけることになりました。日本語学科の生徒の方は日本に興味がある方ばかりでしたので、お互いに母国語を教えあうタンドেমをしたり、休日にはカフェに行ったり、お家にお邪魔させてもらいゲームをして遊んだり…、このようなことを一緒にできる友達と出会うことができ本当に良かったと思います。振り返ると良いことばかりではなく、納得のいかないことも何度もありましたが、それらを含めてとてもいい経験をさせて頂いたと思っています。

